

# 予期せぬ不安が短期大学生に及ぼす影響

—新型コロナウイルス感染拡大状況の及ぼす影響についての非構造化面接から—

高橋美枝

## The Impact of the Unexpected Anxiety on Junior College Students: From Unstructured Interviews about the Impact Because of the Spread of COVID-19

TAKAHASHI Mie

キーワード：予期せぬ不安、新型コロナウイルス感染症、短期大学生、学生生活、非構造化面接

### はじめに

2020年初頭から新型コロナウイルス感染症が世界的な規模で広がり、日本においても1月に初めての感染者が確認され感染者の増加が進むなか、2020年2月27日に政府から小中高等学校へ向けに一斉臨時休校が要請され、全国的に休校が開始された。3月19日に「新型コロナウイルス感染症対策専門会議」が公表した状況分析と提言に基づき、3月24日には文部科学省高等教育局から「令和2年度における大学等の授業の開始等について」（通知）が発出され<sup>1)</sup>。そこには、大学等における年度始めの行事や授業開始時期の延期、学事日程の弾力的な取扱い、遠隔授業の実施等が示され、各大学は対応を余儀なくされた。

2020年4月7日に政府は新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言を発出し、その後4月16日、5月4日、14日、21日と区域変更や期間延長を繰り返し、5月25日に新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言を解除した。

その後、再び感染が拡大し、2021年1月7日に再度、新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言が発出され、1月13日、2月2日、26日、3月

5日と期間延長や区域変更が行われ、3月18日に21日をもって緊急事態の終了が公示された。

大学等は新年度となり、新入生を迎えている中、感染者急増及び医療提供体制における大きな支障の発生を避けるための対応が必要な段階であるステージⅢへの対応として、まん延防止等重点措置が、対象地域と期間を変えながら、4月5日から始まり、4月23日にはまた緊急事態宣言が発出された。この緊急事態宣言は9月30日まで続き、まん延防止等重点措置についても、9月30日終了まで適用された。

このように、長期間にわたり、落ち着いたかと思えば再び感染拡大が進むという状況が繰り返されていることは、大学生の生活に大きな影響を及ぼしている。

池田忠義ら(2021)<sup>2)</sup>は、2020年度入学生を対象とした質問紙調査を2020年7～8月に実施し、大学入学後の不安を調査している。2020年度の大学新入生が全体として通常時より抑うつ・不安傾向が強い状態にあることを明らかにしている。

中村裕子(2021)<sup>3)</sup>は、コロナ禍の学生と相談の変化として、①オンライン授業による関係性の変化 ②オンライン授業による情報の不足 ③コロナ禍における家族関係の変化 ④意思決定の難しさ ⑤不安や抑うつ感の増大を挙げている。学生の多くが、予想していない体験を強いられ予期

せぬ不安を経験し、コロナ禍が長期化し、明確な出口がまだ見えていない状況に置かれることで、学生の生活はこのようにさまざまな影響を受け、負荷がかかっていることを示している。

梶谷康介・土本利架子・佐藤武 (2021)<sup>4)</sup> は、新型コロナウイルス感染症の影響での大学閉鎖が学生のメンタルヘルスを悪化させる要因を、①孤独感・孤立感 ②学業の変更・中断 ③オンライン授業への不満 ④就職活動への影響 ⑤課外活動（サークル・部活）の自粛 ⑥学内サービスへのアクセス制限 ⑦アルバイト等の雇止め、の7つに分けて説明している。さらに、梶谷康介 (2021)<sup>5)</sup> では、大学生のメンタルヘルス悪化の心理的メカニズムとして、拘禁反応、不適応、喪失体験、不確実性による不安、アイデンティティの危機の5つの観点を示している。

本研究においては、短期大学生に直接インタビューをおこなうことで、新型コロナウイルス感染症による影響について明らかにすることを目的とする。

「新型コロナウイルス感染症の影響をいろいろ受けていると思いますが、その中で感じたこと、感じていることなどを伺わせていただければと思います。」と面接の導入を行い、心理臨床面接の方法による面接を進めた。新型コロナウイルス感染症による感染は進行中であり、調査協力者自身が現在もその影響を受けている状況にある中で、一番自然な形でその思いを調査するための方法として、非構造化面接法を選択した。インタビューはすべて、調査者1名と調査協力者1名の対面面接によって実施した。調査協力者の同意を得て、ICレコーダーによる録音を行い、録音された音声データをもとにすべての面接内容をプロトコルに起こし、このプロトコルの分析を行った。

#### 調査協力者と面接時期

4名の調査協力者のインタビューを実施した。

そのうち、1名の面接は2020年10月に実施した。この調査協力者は当時、短期大学2年生に在学中の学生であった。3名の面接は2021年11～

12月に実施し、短期大学1年生である。いずれの調査協力者も短期大学において、保育士、幼稚園教諭の資格や免許状を取得する勉強をしており、保育者を目指している。

#### 倫理的配慮

調査にあたっては、学校法人小池学園研究倫理規程に基づき、あらかじめ研究テーマ、研究調査の主旨、調査データの扱いや個人情報の保護に関して書面で説明し、同意書に署名を得られた方を対象に面接を実施した。調査内容については、個人情報を保護するとともに、情報漏洩の防止に十分配慮し、個人が特定されることのないように配慮した。

#### 結果

##### 1. 分析方法

すべての調査協力者のプロトコルの中から、ネガティブな表現を抽出し、文脈からそれが何について表現しているかによって分類した。

さらに、ポジティブな表現を抽出し、同様に文脈から何について表現しているかによって分類した。

##### 2. ネガティブな表現とその分類

調査協力者すべてのプロトコルの中で、ネガティブな表現は238箇所見られた。

その表現が表出した文脈から、何について表現しているかによって分類すると、“新型コロナウイルス感染症”“学校生活”“アルバイト”“進路・将来”“対人関係”“自分自身の性格”の6つに分類できた。

“新型コロナウイルス感染症”についての表現は41箇所見られた。内訳として‘新型コロナウイルス感染症自体’に関する表現が33箇所、‘マスク’に関する表現が8箇所であった。“新型コロナウイルス感染症”に分類されたプロトコルにおける表現を次ページの資料1に示す。

感染への不安を感じていると同時に、気が付かない間に感染していて、周囲の人に感染してしまう可能性への不安を感じていることが分かる。また、常にマスクの着用が必要な生活の中で、肌荒れや息苦しさを体験し、ストレスを感じている様子が伺える。

資料1 “新型コロナウイルス感染症”に分類された  
プロトコルにおける表現

( ) 内は同じ表現が複数回使われている場合の回数

<p><b>“新型コロナウイルス感染症” 41 箇所</b></p> <p><b>‘新型コロナ感染症自体’ 33 箇所</b></p> <p>「汚い」(2)</p> <p>「怖い」(2)</p> <p>「うつっちゃう」(2)</p> <p>「亡くなった」(2)</p> <p>「心配」(2)</p> <p>「うつる」(2)</p> <p>「大変なのかもしれない」</p> <p>「対策しなくちゃいけないじゃん」</p> <p>「逃れられない」</p> <p>「もらっちゃうものはもらっちゃう」</p> <p>「もう仕方ないな」</p> <p>「しばらく引きずる」</p> <p>「癖ってもとには戻らない」</p> <p>「危ない」</p> <p>「自分がかかるかもしれない」</p> <p>「自分で気づけていない」</p> <p>「他の人にうつしちゃったり」</p> <p>「誰がなってるかわからない怖い病気」</p> <p>「家を出なくて」</p> <p>「行けるのかなあ」</p> <p>「気をつけなくちゃいけないんだ」</p> <p>「仕方ない」</p> <p>「嫌だなあ」</p> <p>「もらってきて」</p> <p>「うつしちゃったら」</p> <p>「増え始めた」</p> <p>「外にも出れない」</p> <p><b>‘マスク’ 8 箇所</b></p> <p>「マスクがストレス」</p> <p>「邪魔だなあ」</p> <p>「不自由」</p> <p>「マスクしてて」</p> <p>「肌荒れ」</p> <p>「息苦しく」</p> <p>「マスクしなくちゃいけない」</p> <p>「嫌だなあ」</p>
--

“学校生活” についての表現は 86 箇所見られた。内訳として ‘授業・学習 (短期大学)’ に関する表現が 31 箇所、‘授業・学習 (高校)’ に関する表現が 14 箇所、‘実習’ に関する表現が 23 箇所、‘部活動 (高校)’ に関する表現が 11 箇所、‘行事 (高校)’ に関する表現が 7 箇所であった。“学校生活” に分類されたプロトコルにおける表現を資料 2 に示す。

資料2 “学校生活”に分類されたプロトコルにおける表現

( ) 内は同じ表現が複数回使われている場合の回数

<p><b>“学校生活” 86 箇所</b></p> <p><b>‘授業・学習 (短期大学)’ 31 箇所</b></p> <p>「心の余裕がない」(2)</p> <p>「やばいんだな」</p> <p>「仕方ないことだけど、なんかうーん」</p> <p>「やらなきゃいけない」</p> <p>「課題の山じゃん」</p> <p>「これが限界」</p> <p>「言い方悪いけど」</p> <p>「申し訳ない」</p> <p>「めっちゃ悪い」</p> <p>「時間の余裕もない」</p> <p>「死んでしまうよ」</p> <p>「激重の課題」</p> <p>「泣きながらやる」</p> <p>「ギリギリ」</p> <p>「時間の余裕も吸い取られる」</p> <p>「余裕がなくなる」</p> <p>「気持ちももつかな」</p> <p>「座席が決められて」</p> <p>「話し合いとかをする機会が少なくて」</p> <p>「距離を感じちゃう」</p> <p>「なかなか頭に入ってこなくて」</p> <p>「なくなっちゃう」</p> <p>「学べない」</p> <p>「不安」</p> <p>「わからない」</p> <p>「しなくちゃいけない」</p> <p>「難しい」</p> <p>「あんまり使ったことない」</p> <p>「心配」</p> <p>「あんまりしゃべらないように」</p> <p><b>‘授業・学習 (高校)’ 14 箇所</b></p> <p>「心配」(2)</p> <p>「授業がない」</p>
--

「ギリギリ」  
 「一切授業がなくて」  
 「通わない」  
 「だめでした全部」。  
 「とらなくちゃいけない」  
 「覚えなくちゃいけない」  
 「だいじょうぶかな」  
 「どうしよう」  
 「学校もあんまり行けなくなって少なくなっちゃって」  
 「学校が全くない」  
 「学校がずっと休み」

‘実習（短期大学）’ 23 箇所

「不安」（2）  
 「運が悪かった」（2）  
 「焦った」  
 「余裕ないんだな」  
 「息する時間ない」  
 「あー、最悪だなあ」  
 「大丈夫？」  
 「メンタルに来てる」  
 「余裕はないよ」  
 「息吸う暇ない」  
 「仕方ない」  
 「しんどいなあ」  
 「だめだって」  
 「ストレス」  
 「負担はかかる」  
 「死んじゃう」  
 「心配」  
 「なくなっちゃったら」  
 「できなかった」  
 「学んだことがない」  
 「なくなっちゃう場合」

‘部活動（高校）’ 11 箇所

「なくなってしまって」（2）  
 「部活動もすべて中止」  
 「どうしてもできない」  
 「全然大きさが違かった」  
 「みんなで泣いて」  
 「残念」  
 「心残り」  
 「大会にも出れなくて」  
 「踊る場所がなくて」  
 「悔しかった」

‘行事（高校）’ 7 箇所

「できなくて」（2）  
 「行事系が何もできなかった」  
 「悔しかった」

「残念だなあ」  
 「したかった」  
 「全部なくなっちゃって」

‘授業・学習’ について、特に遠隔授業が実施された期間の自宅での学習について、短期大学で体験した場合も、高校で体験した場合も、どちらも不安や負荷を感じていたことが分かる。また、登校が開始されてからの対面授業において、新型コロナウイルス感染症防止策が取られていることも、敏感に感じ取っている。

また、高校3年生で部活動の大会や行事が実施できなかったことについて、悔しい気持ちが示された。

“アルバイト” についての表現は26箇所見られた。プロトコルにおける表現を資料3に示す。

資料3 “アルバイト” に分類されたプロトコルにおける表現

( ) 内は同じ表現が複数回使われている場合の回数

“アルバイト” 26 箇所

「異常」（3）  
 「パニック」（2）  
 「ボロボロ」（2）  
 「断る人権はなかった」  
 「ギリギリ」  
 「遅い」  
 「結構メンタルにくる」  
 「大パニック」  
 「ちょっとしたミスが、大事になっちゃう」  
 「クレーム案件」  
 「品切れ」  
 「すぐくつらかった」  
 「心も休まらない」  
 「しんどかった」  
 「大変な思い」  
 「倒れたら大変」  
 「無理」  
 「少なくなつて」  
 「時間もすごく短くなつたり」  
 「全然働けなくなりました」  
 「来なかつたり」  
 「全然入れなかつた」

“アルバイト”では、食料品や生活必需品を取り扱うアルバイト先での厳しい体験が、心の傷となっている様子が伺える。飲食店でのアルバイトを行っている学生は、休業や時間短縮の影響を受けていた。

“進路・将来”についての表現は18箇所見られた。内訳として‘就職活動’に関する表現が8箇所、‘進路（高校時代）’に関する表現が7箇所、‘将来’に関する表現が3箇所であった。“進路・将来”に分類されたプロトコルにおける表現を次ページの資料4に示す。

資料4 “進路・将来”に分類されたプロトコルにおける表現

( ) 内は同じ表現が複数回使われている場合の回数

“進路・将来” 18箇所	
<b>‘就職活動’</b>	8箇所
「焦ってた」	(2)
「断られてる」	
「情報がない」	
「無理」	
「できない」	
「めっちゃ体調崩した」	
「忙しすぎて」	
<b>‘進路（高校時代）’</b>	7箇所
「不安だなあ」	
「どうしようかな」	
「困ってる」	
「受験生だったので、その不安」	
「大丈夫かなあ」	
「全然定まらなくて」	
「決まらなかった」	
<b>‘将来’</b>	3箇所
「不安」	(2)
「仕事の負担が増えてまま」	

就職活動や高校卒業後の進路選択においても、不安や焦りを体験していることが分かる。

“対人関係”についての表現は51箇所見られた。内訳として‘対人関係（友人）’に関する表現が28箇所、‘対人関係（教員）’に関する表現が1箇所、‘対人関係（アルバイト先）’に関する表現が22箇所であった。“対人関係”に分類されたプロトコルにおける表現を資料5に示す。

資料5 “対人関係”に分類されたプロトコルにおける表現

( ) 内は同じ表現が複数回使われている場合の回数

“対人関係” 51箇所	
<b>‘対人関係（友人）’</b>	28箇所
「会えない」	(6)
「ずるい」	(3)
「空気がすごい悪い」	(2)
「声だけだと」	
「ストレスたまったり」	
「会えない子もいたり」	
「妬ましい」	
「イライラ」	
「心がすさんだ」	
「心の余裕も吸い取られる」	
「ピリピリ」	
「余裕ぶっこいてんな」	
「余裕がない」	
「悩んでる」	
「仕方ない」	
「ギスギス」	
「悪口」	
「しんどい」	
「ストレスをため込みがち」	
「みんなで集まるっている行動すらすべて制限」	
<b>‘対人関係（教員）’</b>	1箇所
「会わない」	
<b>‘対人関係（アルバイト先）’</b>	22箇所
「イライラ」	(3)
「怒鳴られて」	(2)
「威圧的な態度」	(2)
「汚い」	
「敏感」	
「下に当たって来る」	
「すごく怒る」	
「お前の責任」	
「我慢しているしかない」	
「なんでないの！」	
「知らないよ！」	
「理不尽に怒る」	
「耐えられなくて」	
「迷惑かけちゃう」	
「申し訳ない」	
「怒られて」	
「ずっと罵声を浴びせられてた」	
「余裕ない」	

友だちに会えない期間が長くあったことは、寂しさとして体験されたことが伺える。対面授業が

再開された後の実習期間の移動や座席の固定は、友人へのネガティブな感情にもつながっていることが分かる。

“自分自身の性格”についての表現は16箇所見られた。プロトコルにおける表現を次ページの資料6に示す。自分自身の性格についてのネガティブな内容は、友人へのネガティブな感情の生起や、アルバイト等での厳しい体験によって、自分自身のさまざまな感情と向き合うことにより発生したと考えられる。

資料6 “自分自身の性格”に分類されたプロトコルにおける表現

“自分自身の性格” 16箇所
「苦手」
「自分を苦しめてた感」
「敏感に感じ取る」
「つらい」
「ストレスのはけ口なくて」
「詰まった」
「しんどかった」
「性格が悪い」
「限界なのかっていう感じ」
「心すさんだな」
「自分もカス」
「けち臭い」
「すごい嫌」
「気持ちが弱い」
「だいたいぶかな」
「頑張れない」

### 3. ポジティブな感情とその分類

調査協力者すべてのプロトコルの中で、ポジティブな表現は70箇所見られた。

その表現が表出した文脈から、何について表現しているかによって分類すると、“新型コロナウイルス感染症”“学校生活”“アルバイト”“進路・将来”“対人関係”“自分自身の性格”の6つに分類できた。

“新型コロナウイルス感染症”についての表現は3箇所見られた。内訳として‘新型コロナウイルス感染症自体’に関する表現が2箇所、‘マスク’に関する表現が1箇所であった。“新型コロ

ナウイルス感染症”に分類されたプロトコルにおける表現を資料7に示す。

資料7 “新型コロナウイルス感染症”に分類されたプロトコルにおける表現

( )内は同じ表現が複数回使われている場合の回数

“新型コロナウイルス感染症” 3箇所
‘新型コロナウイルス感染症自体’ 2箇所
「落ち着いて」
「行けた」
‘マスク’ 1箇所
「結構慣れて」

“学校生活”についての表現は19箇所見られた。内訳として‘授業・学習（短期大学）’に関する表現が7箇所、‘授業・学習（高校）’に関する表現が7箇所、‘実習’に関する表現が3箇所、‘行事（高校）’に関する表現が2箇所であった。“学校生活”に分類されたプロトコルにおける表現を資料8に示す。

対面で授業を受けること、登校できることの喜びが表現されている。

資料8 “学校生活”に分類されたプロトコルにおける表現

( )内は同じ表現が複数回使われている場合の回数

“学校生活” 19箇所
‘授業・学習（短期大学）’ 7箇所
「冷静になる」(2)
「一生懸命考えて対応してくれたんだろう」
「心の余裕」
「学校に来られるのは楽しい」
「学校来てる」
「たのしい」
‘授業・学習（高校）’ 7箇所
「学校がはじまって」
「すごく嬉しくて」
「あっ、学校来れた」
「すごく安心」
「授業が始まった」
「みんなで一緒に来れるようになった」
「始まった」
‘実習’ 3箇所
「安心感」
「スッキリする」
「ニコニコ」

‘行事（高校）’ 2箇所

「できた」  
「できました」

“アルバイト” についての表現は2箇所見られた。プロトコルにおける表現を資料9に示す。

資料9 “アルバイト” に分類された  
プロトコルにおける表現

( ) 内は同じ表現が複数回使われている場合の回数

“アルバイト” 2箇所

「もとに戻った」  
「入れています」

“進路・将来” についての表現は6箇所見られた。内訳として ‘就職活動’ に関する表現が2箇所、‘進路（高校時代）’ に関する表現が4箇所であった。“進路・将来” に分類されたプロトコルにおける表現を資料10に示す。

いずれも、就職先への好感、受験に向けての行動について表現されている。

資料10 “進路・将来” に分類された  
プロトコルにおける表現

( ) 内は同じ表現が複数回使われている場合の回数

“進路・将来” 6箇所

‘就職活動’ 2箇所

「いいな」  
「好感」

‘進路（高校時代）’ 4箇所

「探してみよう」  
「オープンキャンパスに行った」  
「調べた」  
「この短大にとって決めました」

“対人関係” についての表現は39箇所見られた。内訳として ‘対人関係（友人）’ に関する表現が16箇所、‘対人関係（教員）’ に関する表現が8箇所、‘対人関係（家族）’ に関する表現が15箇所であった。“対人関係” に分類されたプロトコルにおける表現を資料11に示す。

資料11 “対人関係” に分類された  
プロトコルにおける表現

( ) 内は同じ表現が複数回使われている場合の回数

“対人関係” 39箇所

‘対人関係（友人）’ 16箇所

「友だちに会える」(2)  
「気持ちもわかる」(2)  
「親しい」  
「余裕がある」  
「楽しそう」  
「心配はなかった」  
「嬉しくて」  
「友だちの顔見たり」  
「会える子もいる」  
「みんなにも会えてて」  
「楽しんで」  
「ストレス発散」  
「会えた」  
「すごい楽しかった」

‘対人関係（教員）’ 8箇所

「うれしかった」(2)  
「ハッて我に返って」  
「ようやく決心がついて」  
「ありがたい」  
「ここはこうしたらいい」  
「もしよかったら送って」  
「先生の顔見たり」

‘対人関係（家族）’ 15箇所

「団らんの時間が増えた」(3)  
「良かった」(3)  
「早く帰って来る」  
「家に家族でいる時間が増えた」  
「話せて」  
「いっぱい話せて」  
「乗り越えられた」  
「料理を一緒に作った」  
「家にいることが多くなって」  
「家族と話す」  
「ちゃんと話す良い機会」

“自分自身の性格” についての表現は1箇所であった。プロトコルにおける表現を資料12に示す。

資料12 “自分自身の性格” に分類された  
プロトコルにおける表現

( ) 内は同じ表現が複数回使われている場合の回数

“自分自身の性格” 1箇所

「がんばろう」

考察

1. ネガティブ表現に見る新型コロナウイルス感染症の影響

インタビューの Protokolにおけるポジティブな表現が70箇所であるのに対して、ネガティブな表現が238箇所と3倍を超えているということから、新型コロナウイルス感染症が短期大学生に対して大きなストレスを与えているということが明らかである。

そして、“新型コロナウイルス感染症”に分類されるネガティブな表現が41箇所であるのに対して、“学校生活”に分類されたネガティブ表現が86箇所、“対人関係”に分類されたネガティブ表現が51箇所であり、いずれも“新型コロナウイルス感染症”を大きく上回っている。この結果は、池田忠義ら(2021)<sup>2)</sup>の「ウイルス感染よりも、学業や課題活動、友人関係等に関することへの不安が大きく、それらが個人の抑うつ・不安傾向にも大きく関連」と一致している。

新型コロナウイルス感染症への感染等への不安はもちろんあるが、その影響により、対面での授

業が遠隔となったり、実習の時期が変更されたりすることによる学生生活への負担を、学生は非常に強く感じていることが分かる。

また、実習先の受入れ状況によって、学生ごとに実習時期にずれが生じ、授業と並行しての実習を行っていることから、「仕方がない」と分かっている、「ずるい」と感じる気持ちが生じ、それは友人との対人関係に影響を及ぼし、そのことから自分自身に対してもネガティブな感情が生まれている。つまり、次の図1に示すようなストレス発生の流れが生まれてくる可能性がある。

これは、一例であるが、このように、新型コロナウイルス感染症は一人の学生のさまざまな生活に影響を及ぼしており、その影響が複雑に作用しあって、自己肯定感の低下につながる可能性があり、学生支援に当たっては、十分に注意する必要があると考えられる。インタビューにおいても、随所に「仕方がない」という表現が出てきていた。新型コロナウイルス感染症の影響なので、「仕方がない」と感じることは我慢するしかないという感情に結びつきやすく、本人や周囲が気づいている以上の心理的な負荷がかかりやすいことへの留意が必要である。

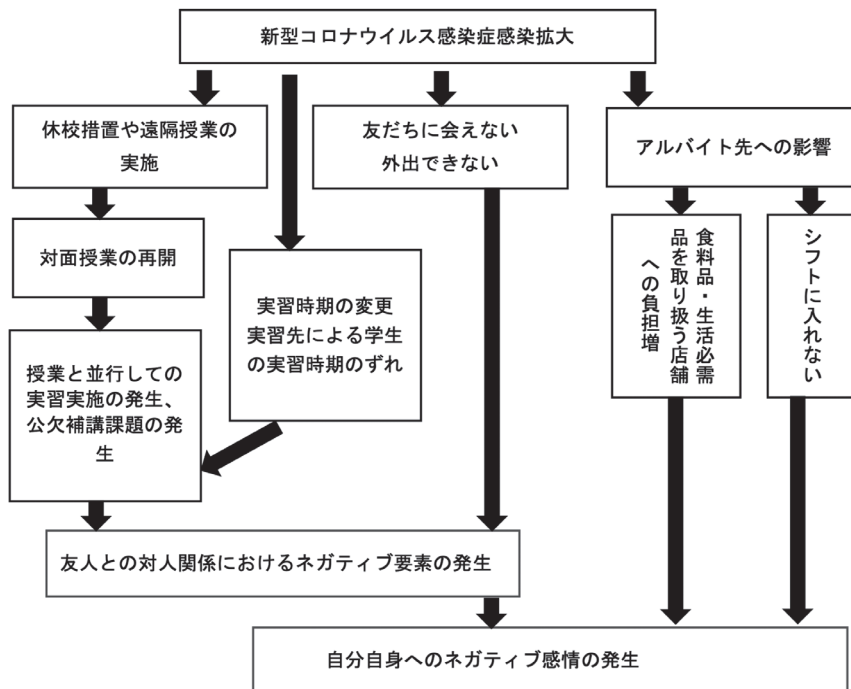


図1 新型コロナウイルス感染症が対人関係や自分自身へのネガティブ感情に及ぼす影響の一例



## 2. ポジティブ表現に見る新型コロナウイルス感染症の影響

ポジティブに表現された内容を見てみると、“学校生活”では登校できた喜びや、何らかの形で‘行事’が行われたことについての表現が多く見られる。人と触れ合うこと、共に学び合うことを求めていると考えられる。

また、ポジティブ表現で最も多い分類は“対人関係”であることも興味深い。特に、友だちと会えることと合わせて、家族との関係についての表現も多く見られている。コロナ禍にあって、家族との関係を再確認したり、再構築することができたことは、苦しい状況を乗り切る上で重要である。

‘対人関係（教員）’も8箇所見られた。心細いからこそ、教員のサポートは心強いものとなると考えられる。

## 3. 今後の課題

本研究におけるインタビュー調査は、新型コロナウイルス感染症の影響を受けている状況の中で実施した。調査協力者は感情の整理がつかない状況にあり、調査者は心理臨床面接の手法を用いて、受容的にインタビューを実施した。その中で、質問紙調査では表現されにくい激しい感情が表出する場面も見られたが、インタビューを終えた段階では調査協力者は話せて良かったと感じていることを伝えてくれた。

一方で、今回の調査においては、学費の支払いを行っている家族の家計の状況や、アルバイト収入の状況など、経済的な問題については話されなかった。これは、調査協力者が家計状況などを話すことをためらったと考えられる。困っていることを表出しやすい調査方法についての検討が課題となる。

新型コロナウイルス感染症は、現在進行形で進行しており、日常生活、学生生活への影響も長期化している。今後も継続した調査を必要としていると言える。

## 付記

本研究の調査にご協力いただいた皆さまに深く感謝申し上げます。

## 引用文献

- 1) 文部科学省 (2020) 令和2年度における大学等の授業の開始について (通知) 令和2年3月24日 元文科高第1259号. [https://www.mext.go.jp/content/20200324-mxt\\_kouhou01-000004520\\_4.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200324-mxt_kouhou01-000004520_4.pdf) 2020年3月28日閲覧
- 2) 池田忠義・長友周悟・松川春樹・中島正雄・小島奈々恵・中岡千幸・榎原佐和子・佐藤静香 (2021) 新型コロナウイルス感染拡大状況下における大学新生の不安とその支援, 学生相談研究, 42(2), pp 91-104.
- 3) 中村裕子 (2021) コロナ禍の大学生と学生相談－相談員の視点から, 子育て支援と心理臨床, 21, pp 72-76.
- 4) 梶谷康介・土本利架子・佐藤武 (2021) 新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) パンデミックが大学生のメンタルヘルスに及ぼす影響: 文献および臨床経験からの考察, 健康科学, 43, pp 1-13.
- 5) 梶谷康介 (2021) ポストコロナにおける大学生のメンタルヘルス－文献と臨床経験からの見解, 子育て支援と心理臨床, 21, pp 77-81.

高橋美枝 (埼玉東萌短期大学教授)